

子規會誌

一二二二号

平成二十一年
七月

平成二十一年度総会について 井手康夫 一

子規のいとこと三鼠 平松牛夫 五

大原其戎宗匠と森連甫(三) 森 慎 吾 一二

石手寺近辺の『散策集』について 井手康夫 三〇

例会記録

○平成二二年四月例会（第七九五回）

四月二十四日（金） 子規記念博物館 出席者四〇名

総会 一、四ページに詳細記録。

講演「子規のいとこと三鼠について」

会員 平松 牛夫氏

子規の母八重さんに似通った面差しが印象的であった。子規の最後のいとこととしての、肉親ならではお話をうかがえた。また、実父岡村三鼠について、余り知られていない貴重なお話があった。全内容を五、一ページに掲載。

○平成二二年五月例会（第七九六回）

五月十九日（火） 正宗寺本堂 出席者二九名

講演「癸丑吟社とそれを支えた人々」

理事 鳶川 武彦氏

「癸丑吟社は、近藤小南、内山黙愛、新野斜村三氏の発起により、大正二年（癸丑）に創立された。今尚活動しており、あと四年で百年を迎える。戦後衰退の漢詩界にあって、風雅の道を究めんとして、賦詠された創立以後昭和四十五年までの珠玉の作品が、同人集に収録されている」と概観された後、漢詩界の現状を述べられた。次に、創立時の絶句三首（近藤小南、池田屋陵、新野斜村）と、初回参加者による柏梁体連句について詳述された。続いて地元月刊雑誌「人間味」（大正一三年創刊、社長安井雅一）を紹介し、

「詩林、癸丑吟社同人」として所載された柏梁体を評釈され、最後に、癸丑吟社を支えた人々について、主な人一七名の来歴と作品を略述された。

○平成二二年六月例会（第七九七回）

六月十九日（金） 正宗寺本堂 出席者二八名

講演「小林一茶と栗田樗堂」

愛媛県俳句協会会長 本会理事 相原惣二郎氏

はじめに栗田樗堂と小林一茶の年表樗堂の系図と「三無益」を含むを配布。まず「小林一茶が何故二度も伊予を訪れたか」と考えて、自分も一茶の古里信濃を訪ねたく思い、結局、三度四度と訪問、その間に新しい発見があった。そのあたりが私の一茶観になっている」から話を起こされ、樗堂と一茶の出自や先祖の生き様、生まれ育った環境について話され、それが作品に深くかかわっていること、したがって作品を理解するにはそういった作者の人生を知ることが大切であること。また、その作者の人生を自分のこととして考えてみる必要があること。などについて懇切に説かれた。

なお、「子規会誌」一〇〇号掲載の御著「伊予俳諧の流れ」、同じく一、二一号掲載の「新刊紹介 門田圭三著『花の旅かさ・花なれや』」にも触れられ、解説して下さった。そのほか、正岡子規国際俳句大賞やノーベル賞など広範囲にわたってお教えいただくことのできる講演であった。

平成二十一年度総会について

松山子規会平成二十一年度総会は、子規記念博物館にて四月二十四日十三時より開催した。

それに先立ち、同会議室にて十時より理事会を開き井手会長より次のような挨拶があった。「私の方からお願ひも兼ねて二、三とお話したい。まず最初は会員の勧誘です。宇和常任に調べて貰った所、この一年間で入会して戴いた方が八名と例年になく多かったです。残念乍ら亡くなられた方が四名、ご健康、ご老齢等を理由に退会された方が十二名で、差引き八名の減員となりました。現在会員数は、市内の方が百十一名、市外の方が七六名で一八七名となっております。

私自身、新しく松山子規会にご入会戴くよう努力を続けていきたいと思っておりますが、役員・会員の皆様にもご協力戴けますようお願い致します。

次は松山子規会にとっておめでたい、喜ばしい事ですが、今年の九月十九日の例会で八〇〇回を迎えます。常任理事会では、取り敢えず子規会誌の記念特集号をと考えておりますが、何か良いお考えがあれば是非ご教示下さい。

最後に「松山発子規事典」編纂の事です。既に子規会誌を通じて散策集の研究結果を発表しておりますのでご承知の事と存じますが、今年度は竿頭を一步進めて取り組みむ事としており、後程和田編集委員長より今年の取り組みむ

〔審議結果〕

平成20年度 決算書 (1)

自 平成20年 4月 1日
至 平成21年 3月 31日

収入の部

(単位=円)

費 目	収入予算額	収入決算額	差 引
会 費	470,000	511,000	41,000
普通会費	470,000	511,000	41,000
賛助会費	0	0	0
寄付金	30,000	350,000	320,000
補助金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑収入	198,568	121,545	△77,023
会誌・書籍売上金	80,000	74,750	△5,250
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	78,568	6,795	△71,773
繰越金	1,432	1,432	0
計	900,000	1,183,977	283,977

会長 井手康夫

ついて話があらうかと思いません。最後に人事の件で、二葉印刷の渡部ヨシ子社長に理事としてご協力を願うことにしたいという提案が満場一致で承認を得た。その他審議事項では特に提案もなかったが後の懇親会の時に、若い会員さんの入会に努力して欲しいという要望が出された。

午後一時、総会を開催し、理事会同様の議事進行で全議案を審議し、何れも提案通り承認された。一旦休憩のあと、正岡子規のいとこで今も健在な平松丑雄会員より「子規のいとこと三鼠」という演題でいとこの行方や三鼠の晩年の様子等興味深い講演があった。

預 金 目 録

平成21年 4月17日
松山子規会

愛媛信用金庫 道後支店

(普通預金) 200,000円 (松山子規会井手会長名義)

平成20年度 決 算 書 (2)

支 出 の 部

(単位=円)

費 目	支出予算額	支出決算額	差 引
報 償 費	160,000	170,000	10,000
謝 礼 金	125,000	135,000	10,000
編 集 費	35,000	35,000	0
旅 費	0	0	0
需 要 費	735,000	806,366	71,366
印 刷 費	520,000	540,780	20,780
通 信 費	80,000	75,645	4,355
会 場 費	15,000	20,680	5,680
食 料 費	50,000	55,843	5,843
事 務 費	30,000	26,333	3,667
備 品 費	5,000	0	△5,000
慶 弔 費	10,000	51,000	△41,000
雑 費	20,000	32,325	12,325
行 事 補 助 費	5,000	3,760	△1,240
予 備 費	5,000	0	△5,000
子規事典編集積立金	0	200,000	200,000
計	900,000	1,176,366	276,366

収入・支出の差額7,611円は次期繰越金とする
上記のとおり諸帳簿は正確に処理されておりました。

監 査 森 慎 吾

平成21年度 予 算 書 (1)

自 平成21年 4月 1日
至 平成22年 3月31日

収入の部

(単位=円)

費 目	本 年	前 年	差 引
繰 越 金	7,611	1,432	△6,179
会 費	480,000	470,000	△10,000
普通会費	480,000	470,000	△10,000
賛助会費	0	0	0
寄 付 金	50,000	30,000	△20,000
補 助 金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑 収 入	262,389	198,568	△63,821
会誌・書籍売上金	160,000	80,000	△80,000
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	62,389	78,568	16,179
計	1,000,000	900,000	△100,000

平成21年度 予 算 書 (2)

支出の部

(単位=円)

費 目	本 年	前 年	差 引
報 償 費	165,000	160,000	△5,000
謝 礼 金	130,000	125,000	△5,000
寄稿謝礼金	0	0	0
編集費	35,000	35,000	0
旅 費	0	0	0
需 要 費	830,000	735,000	△95,000
印 刷 費	600,000	520,000	△80,000
通 信 費	80,000	80,000	0
会 場 費	20,000	15,000	△5,000
会 議 費	60,000	50,000	△10,000
事 務 費	30,000	30,000	0
備 品 費	0	5,000	5,000
慶 弔 費	10,000	10,000	0
雑 費	25,000	20,000	△5,000
行事補助費	5,000	5,000	0
予 備 費	5,000	5,000	0
計	1,000,000	900,000	△100,000

平成20年度松山子規会事業報告書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
20年 4月	◎9日第6回花見会。石手川公園。 ◎18日平成20年度理事会・総会・第783回例会 講師 副会長 和田克司氏、子規の散策集をめくって ◎18日第15回松山発子規事典委員会。	10月	◎19日第789回例会 講師 常任理事 今村 威氏 演題『散策集』今出コースについて。 ◎19日第19回松山発子規事典委員会。
5月	◎19日第784回例会、講師 理事 三好恭治氏。 演題 散策集注釈(その3)石手・道後コース ◎卓話 理事 戒能伸脩氏 『鼠骨のおせり』 ◎19日第16回松山発子規事典委員会。	11月	◎19日第790回例会 講師 副会長 乾 英司氏 演題 正岡子規と南予の関わり ◎19日第20回松山発子規事典委員会。
6月	◎19日第785回例会、講師 理事 二神 将氏。 演題 子規・漱石の歩いた道後の町 ◎卓話 理事 相原惣二郎氏 『坂の上の雲』外伝。	12月	◎19日第791回例会 講師 会員 渡部平人氏 演題 子規時代の伊予の俳人。卓話 副会長 和田 克司氏 演題 散策集周辺の人々の俳句について。 ◎19日第21回松山発子規事典委員会。
7月	◎19日第786回例会、講師 常任理事 忍那 哲氏 演題 正岡子規の文章について ◎卓話 常任理事 宇和宣氏 散策集 中の川コース細見 ◎19日第17回松山発子規事典委員会。	21年 1月	◎20日第792回例会並びに新年懇親会。 道後公民館 会長 年頭の挨拶。 軸の解説 鷹川理事 居合演舞 監査 森 慎吾氏。カラオケ。懇親会。
8月	◎19日第787回例会 講師 理事 平岡 英氏 演題 愚陀仏から城北へ。 ◎19日第18回松山発子規事典委員会。	2月	◎19日第793回例会 講師 監査 森 慎吾氏。 演題 大原其戎宗匠と森連甫(続き) ◎19日第22回松山発子規事典委員会。
9月	◎14日松山子規会 月見会 石手公民館。 ◎19日第107回子規忌法要並びに第788回例会 記念講演 孫 順玉先生 子規と異文化。 副会長 和田克司氏 散策集と子規の俳句。	3月	◎19日第794回例会 講師 理事 三好恭治氏散策 集 石手・道後コースの道順。会長 井手康夫 氏石手寺・遍路橋。卓話 宇和 宣氏・中の川・ 石手寺コース ◎19日第23回松山発子規事典委員会。

平成21年度松山子規会事業計画

(敬称略)

年 月 日	講 演 ・ 卓 話 計 画			備 考	そ の 他 行 事
	講 師	電話番号	場 所		
21年 4月24日	平松 丑雄	089-935-6340	子規記念博物館		4月24日理事会・総会
5月19日	鷹川 武彦	089-976-6432	正宗寺		
6月19日	相原惣二郎	089-945-1251	〃		
7月19日	福田 安典	089-946-4395	〃		
8月19日	二神 将	089-956-4856	〃		
9月19日	今村 威	089-971-3527	〃	卓話宇和宣氏 9月19日107回子規忌 南予支部15周年記念総会講師 和田克司氏	
10月19日	平岡 英	089-941-7509	〃		
11月19日	竹田 美喜	089-933-5416	〃		
12月19日	乾 英司	0894-66-0307	〃		
22年 1月未定	森 慎吾	089-977-7914	道後公民館		新年会。カラオケ大会。
2月19日	上田 一樹	089-931-5566	正宗寺		
3月19日	渡部 平人	089-975-4067	〃		

備 考 (1) 毎月、月例会終了後、『松山発子規事典』編集委員会を開催する。
(2) 必要に応じ常任理事会、並びに編集委員を加えた、拡大常任理事会を開催する。

子規のいとこと三鼠 さんそ

平松 牛夫

私はただ今、宇和理事からご紹介をいただきました平松でございます。この度井手会長より、子規のいとこについて、皆さんにお話をするようご依頼がありました。松山子規会に入会しましてまだ半年にも満たない私が、皆さんの前で、講演をするということに対して、多少のためらいを感じましたが、自分が現存する唯一の「子規のいとこ」であるという事実が、決断させる結果となりました。

私は、子規の祖父大原観山の四男、岡村三鼠の後妻の子として、大正十五年に生まれ、現在八十三歳で、名を牛夫号を牛歩と申します。俳句と川柳を多少たしなんでおります。役職として、現在愛媛県社会人卓球連盟の会長を務めております。これより「子規のいとこと三鼠」と題しまして、お話をさせていただきます。お聞き苦しい点多々あるうかと思いますが、しばらくの間のお付き合いをお願い致します。登場人物は、ほとんどが故人ですので、敬称を省いて説明させていただきます。

明治二十八年四月一日の子規の句に、

故郷はいとこの多し桃の花

というのがあります。この句を見ましたとき、果たして当

時、子規に何人のいとこがいたのか、調べてみる必要があるのではないだろうかと思ひ、今回調査をしてみました。

子規のいとことは、申すまでもなく、父常尚、母八重の兄弟の子に限られております。ここに、いとこと間違えられやすい人物が、二人います。三並良（子規の五友の一人）でドイツ文学者）と服部嘉香です。三並良の場合は、子規の母八重といとこ関係（良の父は八重の母しげの弟）にありますので、子規とは、俗にいう「いとこ半」になります。もう一人は服部嘉香ですが、嘉香は、昭和四十一年の「子規・漱石・極堂生誕百年祭」に、講師として招かれております。当時八十歳でしたが、早稲田大学の教授を経て、日本大学大学院などの教授をしており、博士号を取っております。著書も数多く出しております。嘉香は講演に先立ち、「自分は子規の背中合わせのいとこだ」と言っております。嘉香の父は、藤野古白の父藤野漸の兄の服部嘉陳です。子規のいとこの古白とは、父親関係においてのいとこということになりませんが、子規とは、正式のいとこではないわけです。

さて子規が、明治二十八年に「故郷はいとこの多し桃の

花」という句を詠んだ時のいとこの数は、二十三人です。それ以降に九人のいとこが誕生しております。加藤家の五人、岡村家の二人、岸家の一人、藤野家の一人、計九人が、二十八年四月以降に生まれたいとこです。つまり、最終的には三十二人ということになります。

ちなみに、子規健在中の最後のいとこが、加藤忠三郎で、三十一人目です。子規が亡くなる四ヶ月前に生まれております。そして子規死後のいとこが私で、三十二人目、最後のいとこということになります。子規と年齢が六十歳違います。以上が子規のいとこのすべてでございます。

それでは、個々のいとこについての説明に入ります。まず大原観山の次男で、大原家を継承した恒徳（子規の母八重の弟）の子供七人がいとこですが、次男観恒は一年五ヶ月で他界しておりますので、省きます。妻の久子が、恒徳と十六歳で結婚し、二人の男子をもうけましたが、不幸にして結婚後五年で亡くなっております。後妻として十九歳の常子を迎えました。わずか三か月後のことです。これには私もいささか腹立たしく感じました。普通であれば、一年の法事が済むまでは、喪に服すといって、再婚は致しません。これは現在でも、堅く守られております。にもかかわらず、なぜその必要があったのか。私は、恒徳の九十七年前の手帳を取り出して、詳細に調べてみました。思い当たる点が、一つだけありました。それは、恒徳が戸主であった当時の大原家の家族数が、十七人の大所帯であったということ



「子規いとこ一人となりぬ桃の花 牛歩」

の軸を掲げて講演する平松 牛夫氏

撮影 乾 英司氏

す。この所帯を切り盛りするためには、ぜひとも、内助の役目を果たす嫁が、必要になります。まことにやむを得ない事情ではなかったかと、推測いたしました。

後妻の常子は頑張りまして、りっぱに五人の子を育てました。これで、大原家も安泰です。常子も二十四年という比較的短い結婚生活でしたが、懸命に大原家の為に尽くしました。常子の死後三年半にして、三人目の四十四歳の妻、満寿代を迎えました。恒徳はそれから十五年後に六十九歳で他界いたしました。老後は、いくぶんくつろげたのではないかと思います。子規の金銭面の世話をしながら、大原家を守り抜き、りっぱな生涯を全うしました。

恒徳の手帳に、次のように書かれています。

大正八年六月二十四日、持病再発、大内氏に診察を受く。左の肺上部に出血の模様あり。水にて冷やす……これが恒徳の手帳の、最後の記録でした。その三ヶ月後に亡くなっております。恒徳の子は次のとおりです。

長男尚恒 官設鉄道、大林組役員。享年九二歳。

次男観恒 一年五か月で夭折。

三男典恒 享年七八歳。

四男萃

長女貞子 大原家に嫁ぐ。享年七〇歳。

次女松子 岡宮家に嫁ぐ。

三女静枝 岡田家に嫁ぐ。

ついでながら、この系列には二十三人のふたいとこがい

ます。

次は観山の三男恒忠（子規の母八重の弟。幼名忠三郎、号拓川。外交官、政治家）が継いだ加藤家ですが、五人のいとこがいます。いずれも子規の明治二十八年の句以後に生まれております。恒忠の長男十九郎、次男六十郎、長女あやは意外に若死にしております。これといった記録も残っていません。次女たえは、カトリックに入信し、聖心布教姉妹会の総長になっております。

三男忠三郎はご存知のように、十三歳で、子規の妹律の養子となり、正岡家を継ぎました。野上あや子と結婚して二人の子をもうけております。長男浩は、大阪府で著述業、次男明は、奈良市で庭園設計の仕事をしております。子規の百年祭には、二人とも遺族として出席しております。忠三郎は子規の五十年祭の時に、私と会っております。私 が二十五歳で、忠三郎は五十歳でした。五十年祭を記念して、昭和二十六年九月十九日に建立された子規の歌碑

足なへの病いゆとふ伊豫の湯に
飛びても行かな鷺にあらませば

の除幕式に参列しました。この歌碑は、現在子規記念博物館前に移転されております。

その当時忠三郎は毎日放送に勤務しておりました。加藤家は、長男、次男、長女が若死にし、忠三郎は正岡家へ養嗣子として出しましたので、後嗣者がいなくなり、ひさは、天理教信者の高野四郎を養子とし、加藤家を存続させまし

た。四郎は、積田幸と結婚し、えい、基、幸一の三人の子をもうけております。

子規の母八重の妹十重（観山次女）が嫁いだ藤野漸の家庭は、いとこ六人です。ここには子規と最も深い関係にあった偉才のいとこ、俳人古白がおります。十重は、十六歳で漸と結婚しましたが、十八歳で古白を出産し、古白八歳の時に死亡しています。結婚生活は、わずかに十年です。古白は、本名潔、浮穴郡久万町村（現在の久万高原町）で生まれましたので、通称を久万夫といいました。清新な句風で、子規も大いに期待していたのですが、明治二十八年四月、ピストル自殺したのは、ほんとうに惜しまれます。十重との間には長女琴子がいますが、鹿児島県人の永田勇助に嫁しています。十重の死後、漸は十四歳下の磯子と結婚して、二男二女をもうけました。次男準は、広島商工の教頭をし、三男滋は、松山商業教諭で、俳号を枯柏と号しました。次女節も三輪田高女の教諭で短歌をよくし、号は浪月です。みんな教育畑です。外に三女末がいて、田中亟二と結婚しています。

母八重の妹三重（観山三女）は、岸重崔と結婚しています。三重は姉十重と同じ明治二年に、十三歳で結婚しています。今の中学一年生の年で、ずいぶん早い結婚です。ところが子供の出産は意外と遅く、十六年後の明治十八年に長男駿を出産し、次男喜二男は、長男出産後十三年経って出産しています。その後は、十三年間に六人の女の子を

出産しております。二年に一人ずつの割です。忙しい子あらい（松山方言で、乳幼児養育のこと）です。

長男駿は横浜正金銀行調査部長、次男喜二男は前興銀総裁、日銀政策委員を勤めています。長女雪は香西文雄と、次女隣は親族の大原右一郎（三津浜町長）と、三女重は田中正躬と、四女直は藤野準と、五女都喜代は柴垣清郎と、六女春は山下熊太郎と結婚しています。いとこは計八人です。

私は、この岸家に対して、もっとも意外に思うことがあります。それは、子規の手紙が一通もないということです。昭和五十三年に発売された『子規全集』には、一七三名に一一〇九通の手紙が掲載されております。三重は、子規の叔母であり、重崔は叔父のほずです。にもかかわらず、一通の手紙も『子規全集』の書簡の巻に掲載されていないというのは、どうしたことか。筆まめな子規のことですから、必ず手紙は出していると思います。読んで破棄したか、また手紙を『子規全集』の編集関係者に貸与提出しなかったか、そのいずれかだと思います。理由を知りたいものです。

長女雪の長男俊久は、東大法学部を卒業し、国民金融公庫の理事を務め、春丘と号して俳句をよくし、昭和三十九年八月、六十六歳で徳山にて死去しております。次男秀久は、東京高等商船を卒業後、大連汽船の船長をし、第二次世界大戦中、海軍中佐として戦死しています。岸家のふた

いとこは、二十二二人です。

次に子規の父常尚の兄、佐伯政房の家庭に移りますが、

いとこが三人おります。長男政直は、政房の子だけあって、父より書道、漢詩を教わっており、漢詩については、子規よりも一日の長があったようです。明治二十八年八月八日に、子規は政直に、三並良の周旋による律の結婚についての相談をしております。律はご承知のように、二度結婚しており、最初は明治十八年七月中旬、恒吉忠道と十六歳で結婚し、十か月で離婚、二度目は明治二十二年六月十三日に、中堀貞五郎と二十歳で再婚し、九か月あまりで離婚しています。どうも律には、結婚生活は向かなかったようです。そのため、子規は介護の点で助かっております。子規は政直への手紙の最後に、「小生方よりは、まだ大原へも相談致さず候」と記しております。正岡家の子として、大原家より、まず父の生家の方を重んじたのだと思います。その後に、「近作一首御笑覧に供へ候」として、漢詩を贈っています。

政直の長男光雄は、山口高商を卒業後、松山高校教授、今治精華高女の校長在職中の昭和二十年七月二十六日、松山にて妻文代とともに、戦災死しております。政直の外に、長女ただ（藤原家に嫁す）、次女のぶ（友沢家に嫁す）がおります。

最後に私の実家岡村家（子規の母八重の末弟恒元）ですが、子規のいとこは四人です。父恒元は三鼠と号し、子規が松山の愚陀仏庵で療養中、日参して句作に熱中しました。

齢五十未だやめず鉢印

金屏に千鳥画けと命ぜらる

木曾路来て都の詩人時雨けり（『ほととぎす』一号）

岡村家を継ぎ、松山市役所土木課に勤務していました。最初の妻夏子との間に、長女雪枝、次女梅雨、三女ヨシ子がございます。

私は父三鼠の六十三歳の子で、七十歳で父が亡くなりましたので、私との生活はわずか七年です。父は明治四十年ころから脳の病に侵され、市役所を退職してから、信仰の道に入りました。母平松ヒサとの出会いは、現在の東警察署の真向かいにある六角堂稲荷大明神で、母はおこもりをし、修行をしております。三鼠も度々お詣りにきていて親しくなり、いっしょに暮らすようになったそうです。三鼠が六十歳前後で、母は三十五歳くらいでした。石手二丁目の辻田さんの借家、六畳一間を借りての生活は、相当に苦しかったようです。母は伊予餅を二日ほどで一反織り、二十銭の手間賃と、加藤の伯父が二ヶ月に三円から五円送金してくれるお金で、細々と生計を立てていたようです。この借家へは、秋山好古大将がよく話に來られていたそうです。秋山大将が母の妊娠しているのを見て、もし男だったら私の幼少の時の名（信三郎）をつけなさいと言ってくれたそうですが、丑年に生まれたので、父は単純に牛夫と命名しました。三鼠は、お酒は一滴も吞まず、煙草も吸わない、風呂だけが楽しみで、毎朝欠かさず、道後温泉へ通っていました。人一倍おしゃれだったそうです。私が五歳の

時初めて父は、私を道後温泉へ連れていってくれました。毎日のことですので、なじみの人も多く、友近（長女雪枝の嫁ぎ先）のお子さんですかと言われ、「そうですねのよ」と言ったそのすぐ後に、私が「とうさん」と呼んだために大恥をかいたと、母に話していたそうです。それ以来父は死ぬるまで、二度と私を連れて、外へ出歩くことはありませんでした。その二年後の昭和八年七月十五日に、父は七十歳で亡くなりましたが、晩年の三鼠は、相当に淋しかったと思います。葬儀の費用もありませんので、友近雪枝と久保梅雨の二人の娘が来て、弔いは済ませました。それから三十七年後の昭和四十五年に、明治七年道後で撮影した子規の幼少時の写真が、愛媛新聞に掲載されていました。提供者友近雪枝とありましたので、新聞社に姉である雪枝の住所を聞き出しまして尋ねて行きました。大変な驚きと同時に、心から喜んで迎えてくれました。清水町に妹久保梅雨と二人で住んでおり、学生寮を一軒持っておりまして、その家賃収入で二人の生計を立てていた模様です。

『子規全集』の書簡に三鼠関係の手紙が一通もないので、姉に聞きましたところ、人には恥ずかしくて話せないことだけど、母が子規の手紙二百通あまりを紙縫こまぬいにして、雪枝と梅雨のデンチ（背中に羽織る防寒具）を二枚編んだというのを聞きました。まことに惜しいことです。この手紙を保存しており、また三鼠に脳の病がなかったならば、一般の人からの三鼠に対する評価も、少しは変わっていたの

ではなかるうかと思う次第です。

私の話も終わりに近づいて参りました。最後に私が小学六年生の時に、剣道錬士の先生から教わって、大変感動した話をつけ加えさせていただきたいと思います。

大和柳生の庄で一萬石を領し、徳川二代將軍秀忠の劍術指南役として仕えた柳生宗矩が、小姓を供に連れ、満開の桜が咲き誇っている庭園を散歩しておりました。あまりの美しさにうっとりとして見とれていて宗矩に、突然殺気が襲いました。誰かが自分の命を狙っている。すぐさま小姓に持たせている刀を引き取り、身構えましたが、曲者の正体がかめない。宗矩はすぐさま書齋にとって返し、先程の殺気の原因を探究し始めたのであります。朝食もとらず、やがて昼がまいりました。小姓が恐る恐るお茶を持って書齋を訪れ、「殿、いかがなされましたか。朝食も召し上がりませぬ……」「いや、そちと庭園を散歩していた時、殺気を感じたが、曲者を見出せなかった。今更ながら自分の剣の未熟さを反省しているところだ」と言いますと、小姓が恐る恐る「殿、その殺気は私が起こさせました」「なに、そちが殺気を起こさせたと?」「はい。いかに天下の劍聖宗矩様といえども、あれほど桜に見はれているすきを、今、自分が持っているこの刀で、背後から切りつけたならば、必ず倒せる……と感じました。主人に対し、このような不埒な考えを抱いた自分を、どうか打首にしてください……」とこう申しました。宗矩莞爾として、「そうであったか、よく

ぞ申してくれた。宗矩礼を言うぞ。」といったわりの言葉をかけ、その小姓を終生重く用いたということです。

子規の文学は、柳生の剣にも匹敵するほどの鋭利さがあります。と同時に、「子規の文学こそ、子規が、死から勝ち取った文学である」と、ス様に私は思うのであります。

子規の死に臨み、母八重が、冷たくなりかけた子規の体を、律とともに起こしながら、「サア、もう一度痛いと言ってお見」と、子規の遺体に向かって、涙を浮かべながら言ったこの言葉こそ、母としての愛情の極限であり、亡くなった子規に対する最高のいたわりの言葉であった。私はこのように思うのであります。

終わりに臨みまして、皆様にお願ひ申しあげたいことは、これからも松山子規会を愛していただき、今まで同様、変わらざるご愛顧を賜りますよう、ひたすらお願ひを申しあげまして、私の講演を終わらせていただきます。ご清聴誠にありがとうございました。

(本会会員。平成二年四月例会の講演)

〔参考〕

故郷

養痾雜記

世に故郷程こひしきはあらじ。花にも月にも喜びにも悲しみにも先づ思ひ出でらるゝは故郷なり。(中略)

変らぬはめでたけれど全く変らねば何の面白き事かあらん。変らずと見るうちにいさゝかなながら彼も此も変り行きたるこそ中々に聞きて見てゆかしけれ。人の上につきて第一に変わりたるはわが従弟妹の数のふゑたと其ひとゝなりたるなり。都の人こそ来たまへれわれも其顔見などひしめきあひわが前に跪きて礼を述ぶるもあれば襖の隙より恥かしげに窺ふもあめり。をさなき児ははじめて見たる顔もあり。さらぬもをさな顔のおもかけをおぼるげにとゞめてふり分け髪の子鬢に変わりたるも少からず。曾て見し時には小学読本を高らかに読み上げて誇りに人に聞かせたる男の子の今はや海陸軍を談じ外国の形勢を説く程になりたるもあり。唐黍の殻などにてこしらへたる雛を箱の上に並べてよめさん事に余念なかりし女の子の年は嫁入りすべくなりてわが膝もとに茶を汲みて置きながら顔も得あげて退きたるなど思へば彼方よりは我をもしかく年とりたりと見らんと独り心に恥づる事多かり。(下略)

(日本 明治二八・一〇・六)

松山

寒山落木 卷四

故郷はいとこの多し桃の花

(ほととぎす 三一・四・三〇)

大原其戎宗匠と森連甫きじゅう れんぽ (三)

森 慎 吾

祖父森連翠れんすい(要三郎)(明治十三年(一八八〇)四・一

昭和一六年(一九四一)三・五 六二歳)編集による

「森家史要集成」全三輯しゅう二九巻より、前回(平成一九年一〇月第七七七回例会)講演のテーマに関する資料を抜き出し、これに地図を加え、その「続き」として述べさせて頂きます。今回も、古文書の解説にあたっては、和田克司副会長および小池正義氏に懇切なご教示を頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。

本史要集成(第一輯(第一巻〜一七巻)、第二輯(第一八巻〜二七巻)、第三輯(第二八巻〜二九巻))は、連翠が第二八巻の「はしがき」に、「(略)明治四十二年秋慈父(筆者注・連甫(榮次郎))乃死に會いて一層古文書諸記録の愛護の念に拍車をかけ以て昭和元年(大正十五年)森家史要集成編輯の因を成せり」と記しているように、享和元年(一八〇一)以降昭和十二年(一九三七)まで一三六年間の、古文書類、宗門帳、四十者商舎規則・決算書、魚市場規約・議事録、和氣郡三津市街十四町連合会規則等々、及び世相の記録(新聞号外、劇場チラシ他)を収集、昭和元年より同十三年までの十三年間に亘り、整理、和綴じし

たものであります。

なお、二十五巻に至り昭和の記録整理に入ってから、地方史と見るべき題材が多く、かつ現代の記録に「史要」と題するのはどうかとも考えたが、一般世相の資料は時勢の色を織り込むことにより、記録として一層効果的であり、又今日のことは一瞬にして昨日となり去年となり十年後には一昔となるので、史実保存の意味で題目変更の要はなしとした、と同二十五巻の「はしがき」に記している。

第二十八巻の昭和十三年二月二十五日付け「はしがき」の末尾に「日支事変最大空中戦南昌の大捷ヲ連製敵機三七機撃墜の快ニュースを聞きつ、森要三郎志るす」との付記があるのが、この時代を身近に感じさせる。
また、一部に紙の劣化や剥離が進んでおり、保存対策が迫られている。

1、其戎、連甫、吟雪連歌

(資料①) 四色摺り、明治六年(一八七三)

其戎翁の、「明樂社」設立並びに全国でも三番目に古い月刊俳誌「真砂の志良邊」創刊(明治十三年(一八八〇)一月)の七年前。



其のくもりいさ晴切りて千代のはる(春) 其戎
 頓て若根をおろす門まつ(松) 連甫
 揚ならふ雲雀ほのかに音を張て 吟雪
 癸酉春

資料①

四時園大原其戎宗匠(文化九年(一八二二)五・十八、
 明治二十二年(一八八九)四・一七八歳)、森連甫(天
 保九年(一八三八)四・五、明治四十二年(一九〇九)八・
 一八七二歳)。

2、其戎宗匠、門人書簡

口上の覚 (資料②) 紫色の紙、明治十九年(一八八六)、
 其戎七五歳、連甫四九歳)

夜前は御訪ひ被下難有

存候 其節拜見仕候御文

作 夫々伝議致候共一寸

御尋申上度儀御座候間御閑

之節御越被下度候下御

狂宿(恐縮) 草々

十月廿三日

連甫とのへ

其戎

尤御多用ニ御座候間御閑暇之節ニ而宜敷候

其戎宗匠 謹言
 連甫 謹言
 其戎 謹言

資料②

3、「花之本大神」碑

碑の右の「敬へ婆なほまたしや花明り 其戎拜」の、其戎自筆の書（資料⑤）、明治十九年、其戎七五歳。

碑の写真（資料⑥）との比較では、筆跡の同一性は判断し難く、碑の書は別人によるものであろうか。

碑の左の「あら株塚」（芭蕉翁塚）が所々へ移ったことを説明した連甫の撰文（左記）の自筆下書き（鉛筆書き、かなり薄れている）と思われるもの（資料⑦、連甫四九歳）。

「芭蕉翁霊神は花の本とたゞへ神保んじまします。茲に明榮社のぬし宗匠四時園其戎翁大可賀村に開庵しめされし時、彼の塚へ高吟をゑり付け立て給ひ、其後、弘化山（其



資料⑥



資料⑤

戎居宅の裏の丘)

の傍へ転庵と共に

移し立て給ひなむ

ける。はた、こた

び此地（旧三津魚

市場の北）へうつ

し立てまほしきよ

しを宗匠に乞ひ、

再度移し奉ること

になむなり侍りし。

なほ時世のまどひ

とならぬため、言

の葉の明らかなる

ことをいさゝかし

るし敬ひ侍りぬ。

明治十有九年（一八八六）丙戌十一月十二日 明榮社々

中」（注・資料⑦の発見により撰文を前回に続き再掲）

前掲②、の明治十九年十月二三日付連甫宛其戎書簡「口

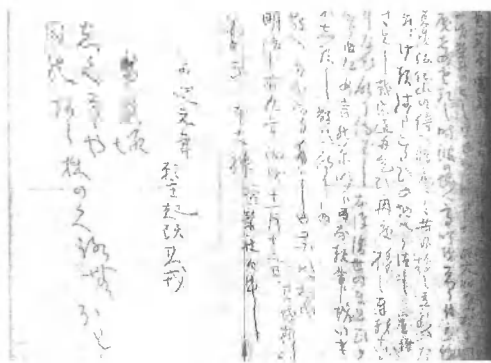
上の覚」（資料②）にある「……其節拜見仕候御文作……」

の「文作」とは、或いはこの連甫の撰文のことかとも思っ

たが、同書簡とこの「花之本大神」碑建立（同年十一月十

二日）との間は僅か二〇日しかなく、関連付けは無理であ

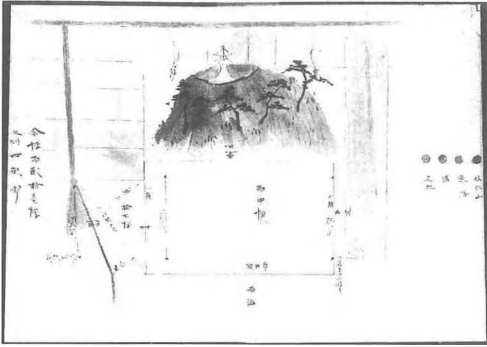
らうか。



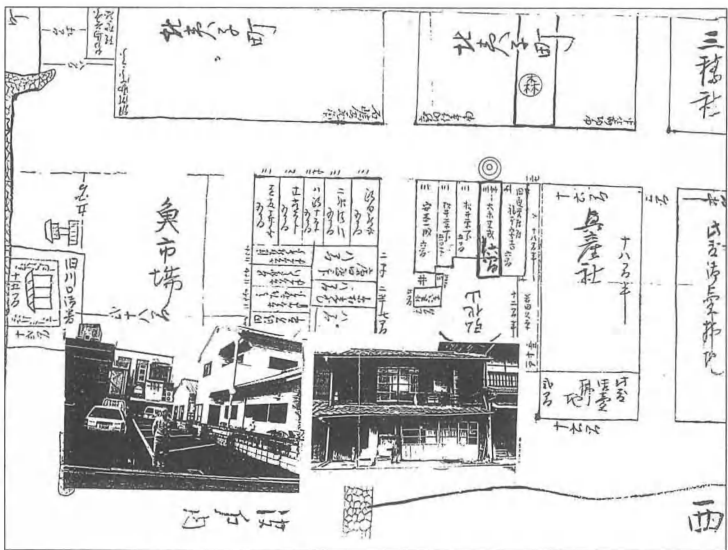
資料⑦

4、こうか弘化山

右の撰文にある其戎居宅の裏の丘「弘化山」の着色図(資料⑧)、明治九年(一八七五)頃)及び旧地図(資料⑨)の「弘化山」の名は、年号の「弘化」(一八四四〜一八四八)によったものであろう。そして「略」このあたりの旧町名須崎町より西側の三穂町・榮町(いずれも旧町名)のあたりは、天保十四年(一八四三)に埋立ててでき上がったもので、現在のフェリー棧橋のあたりに、あき升形という、ごく小規模の港(南北一四〇m・東西一七〇m)ができ上がったのは、さらにその翌年のことであるから……と「権守り」(森元四郎著作集)五二頁に記されているように、弘化山のあるように、弘化山があった榮町は天保一四年に海を埋立てたところである。従って弘化山は元から小島であったのか、又

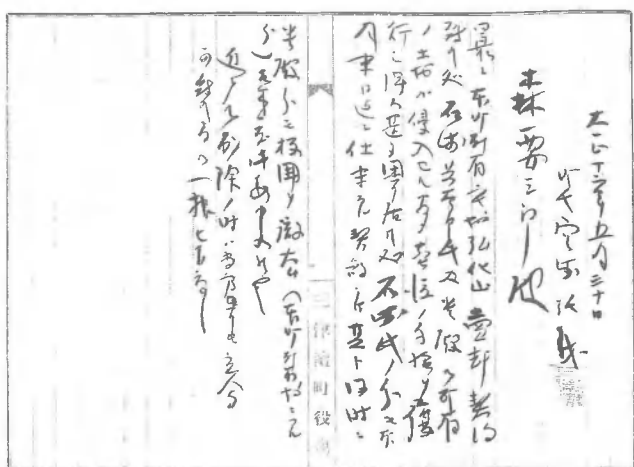


資料⑧



資料⑨

は埋立地に土盛りして出来たものかのいずれかであろう。この弘化山は、大正十二年(一九二三)五月三十日付け左記の森要三郎(連翠)宛三津濱町長宮崎張義氏書状(資料⑩)よりみて、この書状の時点(大正十二年)には存在していたものと推定される。



資料⑩

曩に本町所有宅地弘化山壹却契約
 致候処石崎兵太郎氏及貴殿御所有
 ノ土地が侵入セル為メ賣渡ノ手續トシテ履
 行シ得ス甚タ困リ居候処石崎氏の分も本
 月末日に仕末スル契約ニ付其ト同時ニ
 貴殿分も板囲い撤去(本町所在地ニアル

分)モ今一度此段申し入候也
 追つて可配除ノ時ハ当方よりも立会

可致候間御一報被下度候

(石崎兵太郎氏は石崎廻漕店初代当主石崎平八郎氏の継嗣
 で、石崎汽船(株)初代社長)。

なお、この書状の翌大正十三年十二月に、弘化山の西に
 接する地、或いは弘化山のあった地の一部に入り込む地に
 石崎汽船(株)本社ビルが完成した。このビルは、愛媛県庁、
 萬翠荘を手がけた木子七郎の設計になるもので、文化庁よ
 り「登録有形文化財」に指定されている。

5、「明榮社」と「眞砂の志良邊」

「明榮社月並発句兼題」(資料⑩、明治一六年(一八八
 三)一月)。

明榮社設立並びに「眞砂の志良邊」創刊後三年目、そし
 て子規が唯一の俳諧の師其戎宗匠に入門(明治十九年(一
 八八六)七月下旬)する二年半前のもの。

これにより、月別発句兼題、投句要領等(投句代、毎月
 の締切日・開巻日時、天地人句景品、俳諧宗匠四時園其戎
 (七二歳)撰、書記森連甫(四六歳)・一色其榮、入社規
 則(年間社費外)、取次處(松山及び近郊を中心とした県
 内のほか、香川(三)、徳島(二)、高知(一)、尾道(一)
 を含む計六ヶ所)、投込所(三津濱、森榮次郎(連甫)・

明治廿五年十月廿八日

和氣郡三津濱町長近藤貞次郎

愛媛県知事勝間田稔殿

眞砂の志良邊発行御届

一 題號 眞砂の志良邊

一 記載ノ種類 發句俳諧等ノ學術之ニ関する記事

一 発行ノ時期 毎月巻回

一 発行所 愛媛縣和氣郡三津濱町大字榮町參拾

四番戸 明榮社

一 印刷所 愛媛縣松山市大字魚町貳丁目貳拾七

番戸 福田工場

一 發行人 愛媛縣和氣郡三津濱町大字榮町參拾

四番戸 大原林三郎 天保十四年

二月生 本年本月四九年九ヶ月

一 編輯人 右同人

一 印刷人 愛媛縣和氣郡三津濱町大字三種町四

拾五番戸平民 森鶴太郎 明治元

年六月生 本年本月廿四年四ヶ月

右は新聞條例ヲ遵守シ發行致候間此段御届仕ル也

明治廿五年十月廿八日

愛媛縣和氣郡三津濱町大字榮町參拾

四番戸 土族 發行人大原林三郎

内務大臣伯爵井上馨殿

明治二年（一八八九）二月一日「大日本帝國憲法」公

布（二三年十一月二十九日施行）、翌二三年十月三〇日「教

育に関する勅語」發布、翌々二四年「度量衡法」公布（二

六年一月一日施行）など、明治新政府が制度を整えてゆく

なか出版物の届け出制が布かれたことによるものであらう。

この中の「發行人」大原林三郎は、其戎の継嗣其然、

「印刷人」森鶴太郎は連甫の長男。このとき連甫の継嗣要

三郎（連翠）は十二歳六ヵ月であつた。

「眞砂の志良邊」第百六拾号抜粹（資料⑬）、終刊（明治

二七年九月第百六拾一号）の前号）

「題」虫、稻妻、蕃椒（唐辛子）

「撰」四時園其然宗匠、嘯月齋連甫宗匠、桃垣北川宗匠

嘴つかぬ鳥の姿や唐からし 其然

艸の戸はむしの秋な里人出入 連甫

稻妻や太きく見せる夜の屋万（山） 北川

「眞砂の志良邊」等印刷代

記

（資料⑭）

一 壹円十銭 御句の彫賃 又御画の彫賃共

一 五拾銭 百枚分 スリちん

壹円六拾銭

一 五円四拾壹銭

内

壹円九拾銭五厘

一月分眞砂の志良邊百卅冊代

貳円貳銭五厘

一冊一銭五厘ツ、

壹円四拾八銭五厘

二月分百卅五冊代

三月分百卅五冊代

表紙共三枚

再々付一銭一厘

四月 武市英俊

(明治一八年頃)

明榮社御中

(資料⑩)

6、森連甫(榮次郎)

・佐保姫さねひめや今朝吹き晴れし峰の雲 連甫 庚申の春

万延元年(一八六〇、一三三歳)

この年は、其戎宗匠(四九歳)が三津の南郊大可賀に開庵、傍らに前述の芭蕉翁句碑「あら株塚」(しぐるゝや田のあら株のくろむむほど)を建立した年で、「眞砂の志良邊」創刊の二十年前。連翠が、父連甫の若い時の句を記録したうちの一句。佐保姫は春の女神(佐保山は平城京の東北方にあり、東は季節に配当すると春に当たるのでいう)。

明治八年(一八七五)三津濱町會議々事役就任時の連甫

(二八歳)の手記(資料⑪)

それかしやかい 某這回(注) あれかし この回) 我町會議々事役の選に膺あたれり
某之を

皇天上帝に誓ひ清廉と勉勵とを以て公平の議論を盡し其責任を負擔すへし敢誓ふ

(明治) 八年五月六日 森榮次郎

「皇天上帝に誓ひ：」の文言に、天保九年に生を享け、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応そして明治の代を生きた連甫の真直な気構えを感じ、また往時明治日本を支えた父祖達の勁い心根を垣間見る思いがする。

青野君

三月八日

三月八日

三月八日

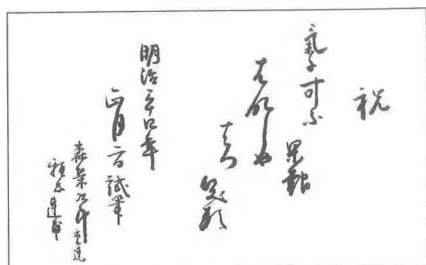
三月八日

月

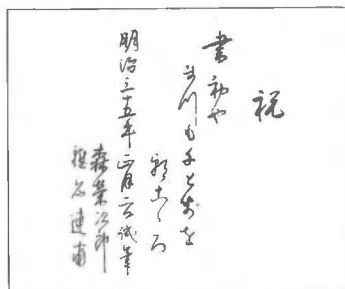
新嘉坡

明榮社御中

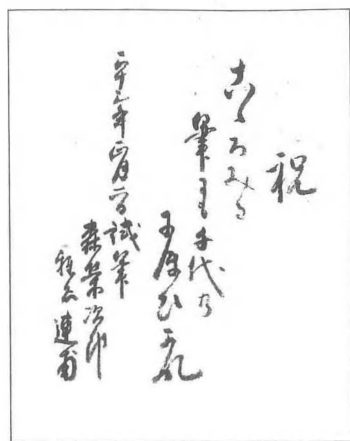
資料⑩



資料⑳



資料㉑



資料㉒

7、潑々園 (いけす)

(1) 潑々園 (いけす) のあった場所

子規の何よりの安らぎの場所であったと思われる潑々園は、「三津浜港 (明治四十三年実測) 地図」(資料㉓) 及び「同実測地図と現地図との比較図」(資料㉔) 並びに現住宅地図から、三津内港改修工事により、現・住吉二丁目十一―二四の岸壁角より西から西南にかけ約十五m乃至四十五mの内港湾内であり、また潑々園の主建物と見られる一棟の東側の大半は、同番地西北角地 (岸壁) の辺りにあったと推察される。

この「明治四十三年実測地図と現地図との比較図」(資料㉔) は、平成二十年八月二十九日 (金) 三津「定秀寺」にて撮影した。この地図は、昭和五年七月一日発行、三津浜小学校創立九十周年記念誌「みつはま」27ページに「築港計画成る」として掲載 (欄外 (下) に「点線は大正五年及びそれ以降の計画図 (筆者注・内港部分の点線はほぼ現在図) 」とある) されているものと同じ。この地図に、郷土史に詳しかった定秀寺先代住職が着色 (現在図を茶色) し説明を加えたものと思われる。「潑々園 (イケス) 〱藩政時代、お船場の満潮を利用し魚のイケスを売り物にした高級料亭、内港改築のため内港の底になる。茶色が現在線である。有名人がよく会食をしている。」との手書きの説明文が記されている。この写真版の (資料㉔) を明瞭にするため、明

右正ニ受取申候也

(明治十四年) 一月廿六日

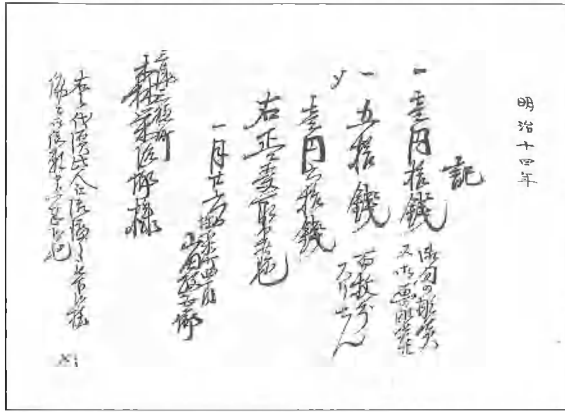
山田政五郎

城下本町四丁目

三津三穂町 森榮次郎様

右之代価此人江御渡し被下候様 偏に御依頼申上奉候也

明治十四年



資料⑭

但一冊ニ付一銭五厘

二月分百世五部 右同断

一 壹円四拾八銭五厘

三月分百世五部右同断但表紙

共三枚一部二付一銭一厘ツ、

右五円四拾壹銭五厘

右正ニ受取候也

(明治) 一六年四月十六日

松山風詠舎主

武市英俊

明榮社御中



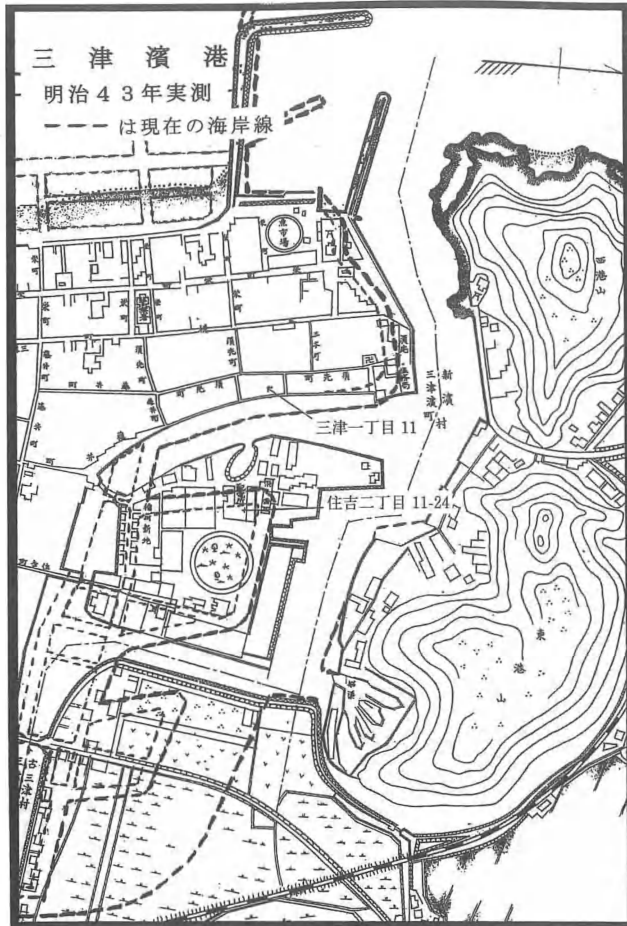
資料⑮

証

(資料⑮)

一 壹円九拾銭五厘

一月分眞砂の志良邊百世冊代



資料②③

子規會誌一〇七号平成十七年十月)

(2) 潑々園のあった場所が、三津浜港湾内の底となった時期

昭和28年「松山港大観」(昭和28年6月発行、松山市港湾課、編纂人 松本常太郎) 18頁に

(3) 三津浜内港改築第一期工事概要

昭和6年8月7日附、愛媛県指令土第2715号を以って許可を受け、直ちに着手した工事は、

(1) (2) (略)

(3) 稲荷新地 (注) 現、住吉2丁目11) 北端を掘取り巾56間の水路となす。

(4) 稲荷新地の西端を掘取り巾56間の水路となす。

(以下略)

とあり、また、昭和十年の

某這回我町會議々事役の選に膺
 承り某之を
 皇天上帝に祈言ひ清慮と勉勵とを
 以て公平の議論を盡し其責任を負
 擔すし敢祈言不
 八辛五月六日
 森榮次郎

資料①

書初め

祝

「富る世の那ほもたゝし（正）や松かさり（松飾）
 尔保者しき古の豊さや花の春

明治廿四年正月二日□（注）□ 森榮次郎重連（五四歳）

（注）完偏に鳥、鶴に同じ。

筆者の実家の縦三九、七cm、横一〇、二cmの大型算盤の裏に、「明治貳拾四年一月吉辰 愛媛県伊豫國温泉郡三津濱町大字三穂町 森度量衡店」の墨書きがある。度量衡法が公布されたこの年、係累のため度量衡店（計量器店）を興した連甫の心の昂まりが感じられる。

またこの前句の「：那ほもたゝしや：」は、四年二ヶ月前に師其戎翁が建立した「花之本大神」碑の句「敬へばなほもたゝしや花明り」を偲んだものであろうか。

なお、この翌明治二五年六月二七日、連甫（五五歳）は

（資料⑧）

知ってか知らずか、子規（二六歳）が松山の河東兼五郎（碧梧桐）（二十歳）、高濱清（虚子）（十九歳）宛、七句を例に挙げ連甫の句を推賞した書簡を送っている（前回述）。

祝
 富る世の那ほもたゝし
 や松かさり
 尔保者しき古の豊さや
 花の春
 森榮次郎重連

資料⑧

祝

古ゝろみる筆尔にも千代乃尔ほひ可那

（明治）三十三年正月二日試筆 森榮次郎 雅名

連甫（六三歳）

祝

氣に可ふ（叶ふ）果報者那し（話）や者つ笑顔（初笑顔）

明治三十四年正月二日試筆 森榮次郎 重連

雅名連甫（六四歳）

祝

書初やま川（松）も千と勢（千歳）を朝古ゝろ（朝心）

明治三十五年正月二日試筆 森榮次郎 雅名 連甫

（六五歳）

（資料⑨）

拜啓陳者來ル六日潑々園(心)ニ
於テ從軍兵士慰勞會開催候間
乍御苦勞同日午前正九時ヨリ
同所へ御來臨被下度右爲御案
内如斯御坐候敬具

區別聯合會及諸君並に諸同御會之御名
同傍御可成候也
明治廿八年二月二日 三津濱從軍兵士慰勞會

森元四郎

注意

- 十一月六日午九時一發ノ烟火ヲ相對トシ
- ア會員一同潑々園へ集集ノ事
- 一會員總代式拜頭道
- 一小学生徒唱歌
- 一萬歳三遍
- 一午前十一時三十分開宴午所三時散會

資料②

つい一四日前のことである。その前夜、三津まで見送りに
来た柳原極堂等十名が、出港が遅れたため終電で帰った後
子規が詠んだ句
十一人一人になりて秋の暮
さらに、この慰勞会の五ヶ月後の明治二十九年(一八九六)
四月十一日、一年間の松山中学校教師の任を終えた漱石
(三十歳)が、「わかるゝや一鳥啼いて雲に入る」の一句を

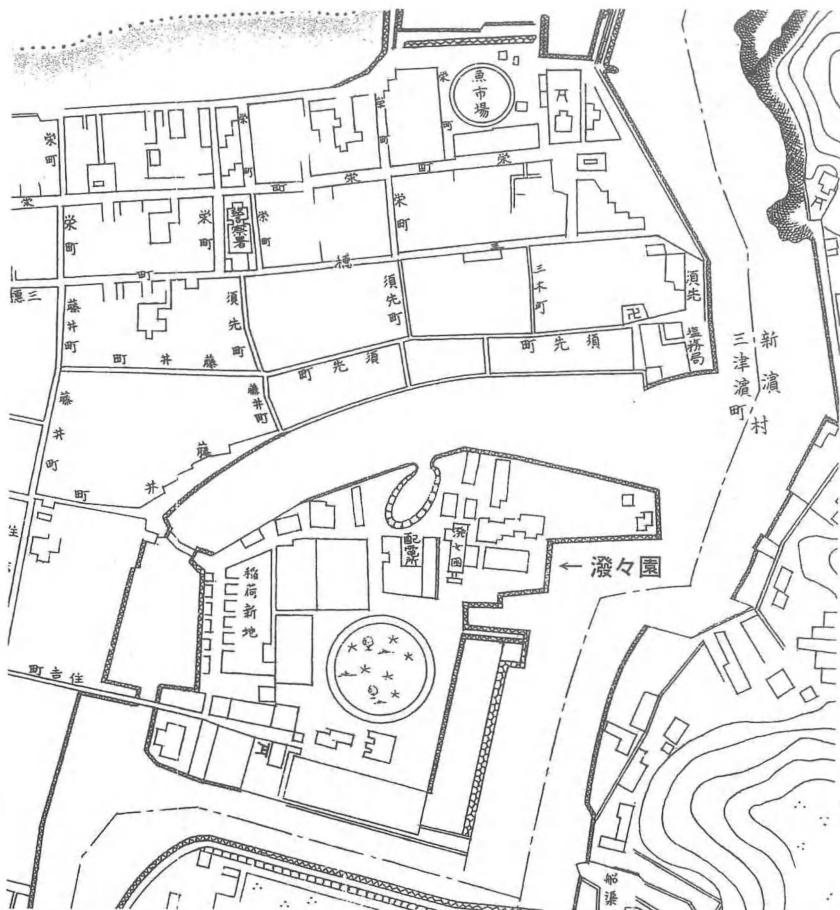
残して三津の海岸から熊本へ発った。(年齢は、原則数え
年表示)
(以上)

【参考資料】

- 「森家史要集成」全三輯・二九卷 森 要三郎編
- 「俳句の里・松山」松山市教育委員会 昭和五六年三月
- 一日初版 執筆 森 元四郎
- 「椿守り」(森元四郎著作集)平成十五年十二月十九日発
行

「子規會誌」一〇七号 松山子規會 平成十七年十月
【訂正】「子規會誌」一一九号(平成二〇年十月)25頁下
段8行目、(正)光風霽月、(誤)高風清月。お詫びして訂
正いたします。

(監査・平成二十二年二月例会での講演)



資料②

治四十三年実測地図に、筆者が上記の点線を書き入れ(資料②)として参考に示した。

この「明治四十三年実測地図」(資料②)は昭和28年松山市港湾課発行「松山港大観」(後記)巻頭に添付されており、実測地図の「潑々園」の箇所が「澆女困」と記されているのは、記入誤りか或いは名称が変ったのか不明である。なおこの前年明治四十二年(一九〇九)三月二五日、潑々園に於て、伊藤博文韓国統監の盛大な歓迎会が三津浜町民により開催されており(注)、この実測地図の前年(明治四十二年)時点では潑々園の名称であったことが分かる(地図は何れも一部)。(注)二神將氏にかみすずむ「子規と三津の生洲(潑々園)」

今は駐車場となっている。酒井黙禪は、その著『松山城と道後温泉』に「その当時の柿の木は今も奥庭にあって高らかに逞しい冬木姿を呈しており、一軒に値する」と書いているが、私も現役時代、バス待ちの間、前の柿の木を眺めていたのを憶い出す。

柿若葉旧家の門の奥深く 咬菜

(編集者注・「咬菜」は筆者の俳号)

なお、子規がお焼きをたべたかどうかは不明であるが、高浜虚子は八十二歳の時、子女を伴って石手寺に詣で、この店に憩い、NHKのラジオ番組の中で「お焼きの味も私の口も変わらなかった」と言い、虚子は幼少の頃から、お焼きは好きであつたらしい。

廻廊

橋を渡って二の門を潜ると、直線コースで仁王門まで約六十米強あり、回ってもないのに廻廊と呼ばれている。明治二十八年頃作られたもので、当時は両側に松が植えてあり、土間であった。今は店も出て、土間にも鉄道線路の敷石を使って、石畳となっている。

石手寺の松

仁王門を潜って三重の塔のやや北西に、三重の塔と同じ位の高さの松があり、入り口の「亀の松」に対して「鶴の松」といわれていた。この松、廻廊の松の次に松食い虫に

亀の松 ↓



柿の木 ←

石手寺門前の茶屋

濠々園(イグス)
 濠々園地 本町に在りて
 濠々園に在りては、
 濠々園に在りては、
 濠々園に在りては、
 濠々園に在りては、



資料②④

地図では当該地が既に現状のものとなっていることより、濠々園のあった場所が三津濱港湾内の底となったのは昭和六年八月より同十年の間であろう。

また工事の完成は、「百式拾萬円を投じたる港湾修築工事も愈近く竣工」として出状された、昭和十二年六月八日付け高橋惣太郎三津濱町長名の三津濱町歌並びに三津小唄の作歌寄贈依頼状(締め切り同年七月十日)を受け同年七月五日、連翠が「三津濱町歌」と題し、

一、潮ぞ薫る百船の港造りの偉業成りて

生氣は躍る魚市の大三津濱の活天地 (一、四番(略))

と作詞しており、また昭和十二年七月一日付け同三津濱町長名で「本初秋の候(内港竣工) 祝賀会開催につき明一六日協議したい:」旨の通知が町各役員宛出されているので、昭和十二年八月頃と思われる。

なお、温泉郡三津濱町はこの三年後の昭和十五年八月一日松山市に合併された。

(3) 濠々園で日清戦争従軍兵士慰労会開催(連甫宛案内状)

(資料②⑤)

濠々園で、日清戦争(明治二十七年(一八九四)八月一日(同二八年四月一七日)戦捷の半年十六日後の明治二八年十一月二日、三津濱従軍兵士慰労会が開催された。午前九時の烟火(花火)を合図に集合。式辞、小学生徒唱歌等式典の後の宴会は、午前十一時半より三時まで三時間半に及んだ。

子規が最後の濠々園参り(明治二十五年(一八九二)八月十六日)をした折の「競吟」で、「名月や人の命の五十年」と詠んだ三年二ヵ月半後のことである。

またこの年(明治二八年)、子規(二九歳)が日清戦争従軍記者帰りの御用船で大喧血し、神戸療養所で療養後帰省、同年八月二七日より十月七日まで五日間「愚陀佛庵」での漱石との同居の後、三津浜から東京へ向け出港し再び故郷の地を踏まなかった十月一九日は、この兵士慰労会の

心を
ゆるめて
ゆつたりと

旬味あふれる会席をたのしみ
あふれる湯にお遊びください。



愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707
予約専用 ☎089-941-7782 (8:45~20:00) ☎0120-10-4848 (8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

(有) 二葉印刷所

渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL(089) 925-0338
FAX(089) 925-2189

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町13-7

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

石手寺近辺の『散策集』について

会長 井手康夫

明治二十八年九月二十日午後

(前略) 玉川町より郊外には出でける 見るもの皆心行くさまなり

杖によりて町を出づれば稲の花 (以下の俳句略)

土手に取りつきて石手寺の方へは曲がりける

野徑曲れり十歩の中に秋の山

二の門は二町奥なり稲の花 (二句間の俳句略)

山門の前の茶店に憩ひて一碗の渋茶に^{つか}勞れを慰む

駄菓子売る茶店の門の柿青し (以下略)

(原文は『子規選集』⑨ 増進会出版社による)

遍路橋

子規が石手寺の方へ曲がる時、右手前方には遍路橋が見えてきた筈である。その当時の橋は、今のコンクリート製の立派な橋でなく、木橋であったようである。残念ながら、梟や市には、当時の資料が残っていないが、愛媛新聞紙上の市民の声に、その事が窺える。(昭和61年4月2日、平成元年10月18日付の記事)

一の門

遍路橋から最初の十字路に入った所に、現存する二の門と同型同大の一の門があった。

屋根付きで、近所の子供たちは雨の日等、この門の下で遊んでいたらしいが、昭和十四、五年頃取り除かれた。

(「春黄金」酒井和太郎著)

お焼店

お焼きは、江戸時代に遍路の接待用として提供されたのが、起こりといわれている。

戦前には、道後温泉への道筋、義安寺辺りまで十四、五軒が、参拝客の多い日に店を出していたようであるが、現在は三軒のみとなっている。中でも石手寺の斜め前にある「三好本舗」は、明治元年創業である。その四代目の三好智佐子さんは、その製法について「臼で上米を挽き、その米粉を熱湯でねる。それに漉^こ餡^{あん}を入れ、かたちを整えて薄く延ばし、鉄板で焼くと出来る。よもぎ入りと白色の二種類がある」と。もっとも、子規と極堂が立ち寄ったと思われる店は、この三好本舗の東隣にあったのであるが、

やられて、枯死してしまった。

石手寺の松で有名なのは、門前にあった亀の松である。

この松、根回り四米、地上三米で二大樹幹は分岐し、面白く迂回錯綜している。東西に伸びる二大枝は、周囲各々一米半もあり、西方に五米、北西方に十米、北東方に九米もあったが、樹高は低くて十米も出ていない。このような全体の姿が亀に似ている所から、「亀の松」と愛称され、近所の子供達も上がって遊んでいたとは、古老の話である。昭和三十年十一月四日、愛媛県指定の天然記念物となる。ところが、廻廊の松、鶴の松について、昭和五十四年八月頃、樹頭部が赤くなり、県、市も実態調査に乗り出したが、マダラカミキリ虫による枯死状態で、手遅れであると診断され、九月頃には、木の全体が枯死してしまった。寺側では、その傍らへ別の小さな松を植えた。

この松、平成十九年三月現在、樹高四米弱、枝張りは西南方へ約七米となっているものの、昔日の面影はない。

参考図書

愛媛県百科大事典

松山城と道後温泉

春黄金

熊野山石手寺

愛媛新聞社

酒井和太郎 (黙禪)

酒井和太郎

北川惇一郎

子規会誌 第二二二号

季刊(四)七、一〇、一月

発行日 平成二年七月一九日

発行所 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇二六二〇一七一八六八

印刷所 尚二葉印刷所

電話 〇八九九二五〇三三八

子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット

定価 58,800円

【編集委員】

粟津則雄／大岡信／長谷川耀／和田克司



四六判 上製・カバー装(各巻368頁～768頁) 定価 3,675円～3,990円 装幀 菊地信義

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられ、るように入力した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大隨筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

【発行】株式会社 増進会出版社

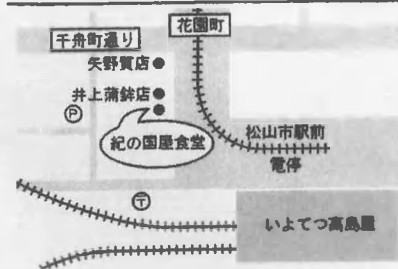
〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17
TEL 055-973-7117

Z-KAI

<http://www.zkai.co.jp/>

お食事処・麵処・宴会 (20名様)

紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、
ふぐ会席、猪鍋
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5
電話 945-1309
(日曜 定休日)

¥400